

町家を活かした「子どもたちと“戦争”展」

— 開催時の展示絵本の研究 —

Utilizing a Merchant's Home for an Exhibition on "Children and War"
and Picture Books from World War II

大沼郁子*

Ikuko ONUMA Tasho

要約 2018年、2019年と2年連続で、「12月8日（パールハーバーの日）」に、筆者の実家を無料開放して、「子どもたちと“戦争”展」を開催した。筆者の実家は、日本の北に位置する宮城県の古くからの商店街にあり、200年ほど前に建てられた蔵造りの店である。先祖は江戸時代、染料や口紅の原料となる紅花を日本中で商う商人だった。この企画展のテーマは、「戦火をくぐり抜けた家屋」で、「戦争の歴史を示す品々」を展示し、「終戦当時、7歳だった私の母の記憶を語る」という3つだ。展示品の中には、日本の子どもたちの戦意を高揚させる内容の児童書も多数あった。この企画展では、一般の見学者以外に、地元小学校の6学年の児童全員（80人）の見学と、子どもたちへのプレゼンテーションを実現することができた。本稿では、古い商店の建物をどのように活用したか、戦意高揚の児童書の内容について、訪れた子どもたちがこの企画にどのような感想を持ったのかということも併せて記したい。

キーワード：戦争展、子どもと戦争、第2次世界大戦、太平洋戦争、軍事絵本

Abstract For two consecutive years (2018 and 2019), my childhood home was opened to the public for an exhibition on “December 8 (Pearl Harbor Day)” and “Children and War.” My parents’ home is located in an old shopping arcade in Miyagi Prefecture, which is located in northeastern Japan. This 200-year-old merchant’s home was used by my ancestors during the Edo Period (1603-1867) to sell safflower, the raw material used for dyes and lipsticks all over Japan. The main titles of exhibits were “A House that Survived the War,” “Items Showing the Events of the War,” and “Recounting the Memories of My Mother, who was 7 at the End of the War.” Among the items on display were children’s books from the time that were intended to inspire Japanese children to support the war effort. In addition to the general public, all 6th graders from the local elementary school (80 children) were able to attend the exhibition and see a special presentation. Here, I would like to explain how the storage building was used for the exhibition and to share the impressions that children had upon seeing the propagandistic picture books for children.

Key words : An Exhibit on the Experiences of War for Children, Children and War, World War II, Pacific War, Military picture books

【はじめに】

2019年12月7日・8日の2日間にわたり、第2回となる「子どもたちと“戦争”展」を開催した。前年の2018年に引き続き、筆者の実家を無料開放し

* 学術研究員
Researcher

ての実施であった。平成最後と令和最初の2年に亘って、太平洋戦争開戦の日に「戦火をくぐり抜けた家屋」で、「戦時中の品々」を展示し、「終戦当時、国民学校1年生だった母の語り」をライブで行う3つを柱にした企画展をどうしても実施したいと考えていた。時代の節目にあって、忘れてはいけない歴史が風化していくことを防ぎたかったのと、児童文学を研究する者として、日本の戦争児童文学作品の内容が、自分たちに関連のある歴史だったのだと思っていない子どもたちが多いということを感じてきたからだ。もちろん作品を通じて、銃後の生活や空襲・食料品不足という内容を子どもたちに伝えるということは重要だ。しかし、現実には子どもたちはそれが自分たちに連なる歴史であることを認識していない。自分たちが暮らす身近な町にも、戦争の影響があって、そうした歴史の果てに今の自分がいるということを感じ取ってほしいと常々考えていた。そのための企画展であった。

第1回は意図したとおりの企画展になった。だが、一番伝えたいと思っていた子どもたちの来場が少なかった。そこで今回は、子どもたちへの周知が不足していたという第1回企画展の反省を踏まえて、事前に地元小学校への「お知らせ」を詳細に行った。宮城県村田小学校宛てに手紙による説明を行い、小学校校長に理解していただくことができた。また6学年担任教諭の「先の大戦を子どもたちに知ってほしい」という積極的な姿勢と意欲によって、6学年の児童全員への展示と授業が実現した。

また、前回の開催後、さまざまな方面から戦前・戦時中の玩具や絵本、日用品などを譲渡される機会に恵まれた。第2回は筆者の家に残る品々の他にそれらの展示も行った。特に譲渡してもらってありがたかったのは大日本雄辯會講談社「子供が良くなる 絵本」のコレクションであった。この絵本シリーズは幼少期に母も読んでいたものだったが、戦後の教育改革やさまざまな混乱の間に紛失してしまったものだった。母自身もこの絵本シリーズのことを記憶していた。

本稿では、この絵本シリーズについての分析を行った。また来場してくれた小学生たちがこの企画にどのような感想を持ち、何を学んだのかということを知りたい。戦後77年を経た現在、戦勝国や敗戦国という区別はすでにない。多くの国々で第二次世界大戦の記憶は風化し、かつての事実をどう後

世につたえようとしているか模索していることがわかった。また国によって伝えている内容が異なることもわかった。本稿では併せてそのことも論じたい。今後、どのように戦争というものを後世に伝えていくかということを考える基盤になると考えるからである。

1. 企画展の全体的内容

第1回企画展と同様の点については簡単に述べることとする。(注1)

①会場

筆者の実家は江戸時代後期から続く商家だ。最近では、郷土の歴史を学ぶため地元の小学生たちもたびたび訪れる。そのため、個人宅・個人商店ではあるが見学者や観光客の受け入れには慣れていて、また東日本大震災以後、商店の2階部分を私設資料館として常時公開している。

②学校日誌

前回同様、地元資料館である村田町みらい館の協力を得て、村田小学校の学校日誌の一部をパネルにし、その内容を証明する品々を合わせて展示した。例えば、終戦直後の学校日誌に「教科書削除の徹底」と記載されたパネルと共に、当家に残された「墨塗り教科書」を展示した。このことによって、ただの遺物の展示に終わるのでなく、歴史の裏付けを取ることができるという効果があった。

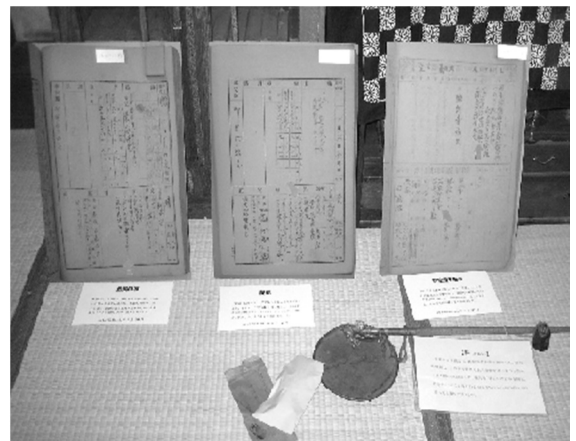


図1. 学校日誌「配給切符の配布」のパネルと配給時に使用した秤

③事前準備

・新聞掲載-できるだけ多くの人に周知してもらうために新聞社の取材を受けた。新聞掲載により、地元だけでなく、広く宮城県内から足を運んでもらうことができた。また、事前に企画展の意図が記事に明確に書かれていたので、来場者にとっても訪問が的外れになることがなかった。



図2. 企画展を取り上げた新聞記事(注2)

・新たな冊子の作成-前回の企画展の趣旨と展示物の説明を書いたパンフレット、告知のチラシを作成した。今回はそれに加えて新たに、母の戦争体験記『わたしの戦争体験記-やつでの葉かげから見た村田の暮らし』と題したA5判、全14頁からなる冊子を自費で200部発行した。(注3)



図3. 母の戦争体験記冊子の表紙

前回、二日間で7回に及ぶ語りの時間を設けた際、訪問客から後で読んで残るのが欲しいと要望が複数あった。第1回目の企画展の際、母の語りを熱心に聞いていた訪問客から、ライブで聞くことはもちろんよいが、やはりその語りの内容を後で振り返ってみたい、ノートを取り切れないという声があがった。また、1回10~15分のライブには時間に限りがあるため語りの内容にも制限があった。もっとたくさんの内容を伝えるためには、冊子が必要であった。

冊子の内容は出征兵士の見送りに始まる。母が幼少時、口ずさんだのは童謡よりも軍歌であったこと、16歳で行き先も告げられず出征した(母の)叔父が、仙台駅を出てわずか10分後に戦地に向かうはずの列車から降ろされて玉音放送を聞かされ、終戦を知ったこと、今はすでに亡き叔父が戦後、虚無感を抱いて悶々としていたこと。また家族の食料難を回避するために裏庭の桜の樹々を切り倒して畑にしていたのを見て、戦争というもの日常のささやかな美しさをも奪っていくものだという漠然と感じていたことを綴った。

他にも我が家は商家であるゆえに配給をする側であったことから、限られた商品をどのように分配したのか、昭和20年7月10日夜の仙台空襲の様子や、終戦後GHQが土足で我が家の真向かいに建つ本家ヤマショウに踏み込んで来た際、伯母が紫色の振袖を差し出して退去してもらった記憶、東京大空襲のあと集団疎開でやってきた母と同年の少女が、この東北の地で、はしかのために亡くなっていったことをまとめた。小学校高学年ならば読めるレベルに配慮し、小見出しをつけてエッセイ風に記録した。

母は終戦当時、国民学校1年生という幼さではあったが、子どもには子どもなりの感じ方や理解がある。7歳の子どもの視点でその体験をまとめた小冊子となった。大人になってから見聞きした知識や情報はあえて加えなかった。そのことによって、小学生でも読むことができるような冊子になった。

サブタイトルの「やつでの葉かげから見た村田の暮らし」というのは、当時、母が裏庭の葉かげから見ていた光景に由来する。徴兵された一般の国民が軍事演習をする際、寺、宿、商家などが宿泊先に指定された。我が家も訓練兵を受け入れた。その際、軍曹が若い兵隊をささいなことから激しく殴打する現場を、母は庭のやつでの葉かげから見ていた。軍

靴の紐を結ぶのが遅いという理由で、流血するほど殴られた若者のことが、年齢 80 歳を超えても母は忘れられないという。戦時中という異常事態が人の心さえも変えてしまう象徴的な光景であることから、このタイトルにした。

今回この冊子を発行したことにより、小学生たちの見学後、社会科の教科書と併用し、全国的な歴史と、地元の歴史を比較、復習に用いたと村田小学校の教諭から伺った。実際に体験してきた母の話の直接聞くことが、この企画の最大の特徴だと思ってきたが、やはり、それを形ある冊子にしたことは意義があった。

③「軍事絵本」の展示



図 4. 大日本雄辯會講談社「子供が良くなる繪本」の一部

大日本雄辯會講談社「子供が良くなる繪本」は、1936 年発行の『乃木大将』を第 1 冊として、1942 年の終刊までに、203 号まで刊行された。この絵本シリーズについては、阿部紀子『「子供が良くなる講談社の絵本」の研究』（風間書房、2011）において詳細な分析がなされている。（注 4）

この絵本シリーズは、阿部によって、内容ごとに、【偉人伝】【お伽噺・伝承・神話】【漫画集】【知識絵本】そして、【軍事絵本】に分類されている。母も幼少の頃、この絵本シリーズを手に取り、親しんでいたが、我が家にこれらは残っていなかった。

しかし、前回の企画展のあと、私が開催した戦争展に賛同した高齢の方々から筆者に、この絵本を 14 冊ほど寄贈していただくことができた。自分が所持しているだけでなく、ぜひ、今後もこうした企画を継続するためにも活用して欲しいという意図で贈っていただいたものだった。本来は、筆者の実家

を活用し、実家に残ったものだけを展示することで、地元宮城県村田町ならではの戦争の姿を伝えたいと考えてきた。しかし、戦前戦中に筆者の母もこの絵本シリーズを手にし、目にしていた思い出の品であったということから、これらの寄贈の品も展示に加えることにした。

当時、就学前で文字を読むことができなかった母は、この絵本シリーズの絵を眺め、誰かに読んでもらっていたという。『日本よい國』（注 5）の絵本の 54 頁には、「愛國行進曲」の歌詞が、地球の中心に日本が描かれた絵と共に掲載されている。そのページを開いた途端、母がこの軍歌を歌い出したのには驚いた。昭和 13（1938）年発行の本なので、当時、母は、まだ 4、5 歳だったと思われる。この年齢の時に親しんだ絵本を、80 歳を過ぎて再び手に取った瞬間、脳裡に残った歌詞とメロディが甦り、母が口ずさんだ光景を目にして、絵本というメディアが、幼児期はもちろん、大人になってもいかに影響を及ぼすかを深く考えさせられた。この出来事は、新聞取材の時に起きたことである。取材に来た記者もそれが強く印象に残ったようで、後日、ご自身のコラムでこの時のことを書くこととなった。（注 6）

寄贈された 14 冊の内訳は、『乃木大将』『東郷元帥』『伊藤博文』『ヒットラー』など当時、偉人とされた人物の伝記が 4 冊あった。軍事絵本のカテゴリーではないが、内容は彼らの軍功をたたえたものだ。特に『ヒットラー』については、彼が少年時代から勤勉で、苦勞を重ねた末、ドイツに君臨するに至ったというサクセス・ストーリーになっている。また当時の日本と同盟を結んでいたという絆の深さについても語られている。ヒットラー賞賛の絵本は、現代社会では手にすることはもちろん、目にすることはない記述になっており、当時の価値観を知る資料として、ある意味貴重なものと言えるであろう。

【知識絵本】という括りになっているが、『日本の海軍』『空ノマモリ』『軍馬ト軍犬』が 3 冊。海軍や陸軍の組織構成やシステム、その役割について描かれたもので、知識や情報を学ばせる意図を持った絵本だが、戦意高揚を促すことは明らかだ。知識絵本に分類された絵本には、他にも『動物畫集』『乗物づくし』『鳥づくし』『魚づくし』『お家の道具』など図鑑として楽しむことができる絵本が発行されている。

【神話・伝承】の『日本よい國 建国繪話』は、

「古事記」を元にした子ども向けの神話の絵本である。国生みの神話に始まり、瓊瓊杵尊から神武天皇へ、そして今上天皇へと続く系譜を物語として示している。また天皇の軍勢による戦が聖なるものであることが語られているものの、悪者とされる敵がどのような悪事を働いたのかは、明確に描かれていない。

そして、【軍事絵本】の『忠勇感激美談』『支那事変武勇談』では、日中戦争での武勇伝が描かれている。

頁ごとに異なる画家によって絵が描かれているが、多くは梁川剛一、伊藤幾久造らによるものが多くを占める。中国の軍隊にたいしていかに、日本軍が勇猛果敢に戦ったかが、具体的に描かれている。殴る・蹴る・銃剣で突く・斬り殺すという場面までリアルに描かれているのには驚く。そして、それらが正しいことであり、その戦闘のあと、中国の一般市民に感謝されていることが描かれている。

しかし、前述の阿部によれば、こうした戦闘の様子は、画家が実際に見た真実ではなく、過去の絵の模倣もあり、史実と違うことが指摘されている。阿部は、梁川剛一が「最も迫力のある絵を描いた」としながら、画家の意識の有無にかかわらず、「戦場の真実の一端をにじみださせてしまうのではないだろうか」と疑問視する。そして戦闘と殺戮の事実の有無ではなく、絵本として描くことで当時の子どもに「『死』ではなく、『冒険』的なわくわく感を与えていたと考えられる」（注7）と指摘する。

戦争を鼓舞する内容の本ではあるが、物語絵本という形をとり、当時としては一流の画家や作家に執筆を依頼していたことから水準は高かった。

軍事絵本の特徴は、刀を振り上げて日本兵が多く登場することであり、それは歴史的な事実ではなく、「チャンバラ活劇」を参考にした構図になっていた。当然だが、こうした戦闘は昔でもあり得ない形であった。阿部はそうした構図による絵本から「戦意高揚」の促進といっても、仇討ちや「今に見ている」という仇討ち的感情や血肉湧き踊るエンターテインメント的な楽しみ方がなされたと推測する。（注8）

「軍事絵本」と分類される絵本には、寄贈していただいた本を含めて 25 冊ある。いわゆる「支那事変」突入後、すぐに『忠勇美談』が刊行され、日露戦争や満州事変が色鮮やかに描かれた。その後ぞくぞくと『支那事変美談』『支那事変武勇談』『支那事変大勝記念号』『支那事変奮戦大画報』『支那事変大



図5. 軍事絵本の一部

手柄話」と、日中戦争の正当性や手柄を強調し賞賛する内容の絵本が発行された。

この絵本シリーズには、『桃太郎』や『孝女白菊』『浦島太郎』など、現在も「新・講談社の絵本」として発行されているものが多い。今もなお発行されているシリーズを見ても日本画を基礎とした繊細な描写、美しい色彩や丁寧な日本語の語り口の文章は、

子どもたちの美的感覚に作用し、目を楽しませている。

それゆえに、こうした媒体を使って、子どもたちの敵愾心をあおり、戦意高揚を植え付けた功罪は重い。

2. 子どもたちに伝える

① 前回企画展の反省

前回の企画展での反省点は、「子どもたち」が戦争にどのように巻き込まれ、どのような暮らしをしていたのかを、現代の子どもたちに伝えたいと思いつながりながらも、肝心の子どもたちには、周知不足でほとんど知らせることができず、結果として子どもたちが訪問してくれることがわずかしかなかった。最初の企画では、親たちに連れて来られた小学校低学年や幼稚園の子どもたちもいたが、そもそも戦争の意味が分かっておらず、「昔の道具」をただ眺めて帰るだけで終わってしまった。

その反省を踏まえて、2回目の企画展は地元小学校校長宛てに、事前準備で作成した小冊子をと企画展の趣旨を手紙にしたためて送付していたところ、6学年の全児童80名の見学が実現した。(ただし12月7・8日は土日だったため後日実施) 集団疎開の児童を受け入れた本家「ヤマショウ記念館」で母の語りと、展示物の見学を行った。

② 子どもたちへの企画展

第2回「子どもたちと“戦争”展」を開催するにあたって、地元小学校校長宛てに、ぜひ児童に周知してほしい旨を文書にて書き送ったところ、村田小学校校長から6学年担任教諭に伝達していただくことができた。ちょうど、社会科の日本史の授業で第二次世界大戦を勉強するのが3学期に入った時期であるということから、年明けの2020年1月13日の実施となった。

6学年2クラスを二つに分けて、各50分ずつの授業となった。筆者の実家商店の2階部分に40名を収容するのは安全性から考えても不可であったため、実家向かいの本家「ヤマショウ記念館」で行うことになった。「ヤマショウ記念館」は、当年初代の兄の家であり、現在は町に寄贈され、記念館として常時開館している。昭和20年3月の東京大空襲以降、東京都杉並の小学生女兒30名を受け入れたのはこの家である。



図6. 小学生への戦争体験の語り

50分授業のうち25分が母の話を聞く時間となり、残り25分は1クラスをさらに二つにして、防空壕への経路を実際に歩いてもらう実践班と、室内で展示物を見る見学班に分けた。実践班では、「空襲警報が鳴ると、服のまま寝ていた子どもたちが枕元に防空頭巾や水筒や布製のカバンを身に着け、玄関脇の布団にバケツで2杯分の水をかけてびしょびしょに濡らしたものを母とその妹の二人でかぶって、暗闇の中、避難した」庭の通路を歩いた。当家は、江戸時代に紅花売買により京都との取引があったことで、家屋は京の町家の建築を生かしている。間口が狭く、裏庭に行くまでの通路が細い。通路幅は1.5m程度であるが奥行は表門から裏門まで約100mある。その細長い通路を当時7歳と4歳の子どもであった母と叔母が、どんな気持ちで歩いて避難したかを体験してもらった。また、本家である「ヤマショウ記念館」には、杉並第八国民学校の子供1年生から3年生まで30名を受け入れており、その寝起きた部屋も残っているので、それも見てもらった。

一方、見学班はGHQの指導により削除された「墨塗教科書」、国家総動員法により供出させられた筆者の祖母の「指環の石」に特に興味を持ったようだった。また、「ヤマショウ記念館」には母と本

家の娘が、GHQ が来た際に隠されていた「電話室」が残っている。玄関から GHQ が土足で入り込んできた時、どいう位置からそれを見つめていたのか実際に電話室に入って体験した児童もいた。

地元の小学生であるため、筆者の実家によく買い物に来る児童や、家族が筆者や母と家族と知り合いの児童もいた。母から、「あなたのおばあちゃんとは、子ども時代に友達だった」と声をかけられた児童は、自分の祖母が筆者の母と同じ年齢ならば戦争体験もあるはずなのに、その体験を聞いたことがなかったと驚くとともに、この企画展に来たことで自らの家族の体験を聞き出すきっかけにしたい、と口にしていた。

③子どもたちの反応

村田小学校6年生の担任のA教諭の承諾を得て企画展のあとにいただいた手紙と、子どもたちの手紙を一部抜粋で紹介したい。

【6 学年担任 A 教諭の手紙】

(中略) 私事で恐縮ですが、6年生を受け持つ度に「平和を願う生の声を子どもたちに聞かせたい」という思いで、戦争を体験された方々のお話を聞かせていただく授業を必ず行っております。昨年、村田町に赴任し、教育委員会の方々とカネショウ商店(注 筆者実家)へお伺いした時に、お話させていただく機会がありました。その時に「6年生を持つ機会があったら、ぜひ戦争のお話をお願いしよう」と、実は心の中で決めておりました。

そして11月末に入り、戦争の学習に入る準備をしている時に、小学校宛てにいただいた(筆者の)文書を拝見いたしました。すぐに教頭に相談して、連絡を取らせていただき、今回の校外学習の実現となりました。実際にお話を聞かせていただき、実物を拝見し、「こんなにも具体的に当時の様子を知ることができるなんて!!」と感動いたしました。戦争を体験している方々がどんどん少なくなるこの世の中で、(筆者と母に)お話を伺えたことは、子どもたちにとって何ものにも代えがたい貴重な体験となりました。「長く続いた戦争」の授業を終え、子どもたちなりに、心に残ったこと、学んだことを手紙に書き表しました、目を通していただけました幸いです。(後略)

【子どもたちの手紙 一部抜粋】

児童たちの手紙はA4便箋に各一枚であった。時候の挨拶や戦争展への感謝の言葉は省略し、企画展についての感想のみを抜粋することとする。漢字使用や文末表現はそのまま記載することとする。重複する内容の感想は省略した。

- ・教科書の戦争に関わることは、黒くぬりつぶしたり、のり付けをしたりするのは、びっくりしました。
- ・授業でならっていない場所もくわしくおしえてもらってとても勉強になりました。
- ・すみでぬられた教科書や当時、使っていた秤などをみられてよかったです。私が、おしえてもらったことを父や母にはなしたら、しんげんに聞いてくれました。
- ・とても勉強になったことの1つ目は、集団疎開のことです。東京の子どもたちは親元をはなれて地方に行かなければならなかったのかわいそうだなあ、どんな思いで村田に来たのかなあと思いました。2つ目は隣家の息子さんが兵隊に行って戦死した話です。その兵隊さんのお母さんは本当は戦争は望んでいなかったのではないかと思います。
- ・とてもいやな思い出だったと思うのに、ほくたちに話してくださりありがとうございます。若い兵隊さんがスパイク(注 軍靴)で顔をなぐられて血がたくさん出ているのに立ったままでいたという話を聞いてとてもおどろきました。
- ・戦争の時に実際に使っていた物などを見て戦争のくらしはとても大変でつらかったということがわかりました。
- ・毎日、降ってくるかもしれない爆だんにそなえなくちゃいけない日々なんて、私だったらたえられません。
- ・外国の軍人の方(注 GHQ)がきたという話のときにはほんとうにこわくて、ほくもすこしなみだをうかべました。
- ・土足でアメリカのへい隊(注 GHQ)が家に入って来たことをきいてびっくりしました。銀飯(白いご飯)を正月にいっぱい食べたことを聞いて、やっぱり、白いご飯を食べられることは幸せだと思いました。
- ・私は、社会の勉強では聞いていないことを教わることができたのでとても勉強になりました。

- ・ 実際の水筒や兵隊のぼうしや、電話ボックスを見られて勉強になりました。
- ・ 集団疎開でこの家にやって来て、はしかで死んだ1年生の女の子はとてもかわいそうだと思いました。
- ・ 本当に、あの戦争で生き残っていたことはとてもすごいと思いました。
- ・ ぼくは、戦争が始まった日と終わった日が分かってとてもうれしいです。
- ・ 学校でも戦争についての授業をやったけど、やっぱりお話を聞いたことで「とても大変だった」ということが分かりました。
- ・ 若い兵隊の頬をくつでたたいたのを見たという話にはおどろきました。
- ・ 昔の村田町に外国の兵隊がいきなり来たことや疎開児童がはしかで死んだことにおどろきました。
- ・ ビックリしたことが2つあります。一つ目は戦争を体験した人がまだ生きていうことです。二つ目は戦争が起こっていたことをしっかり覚えていることです。幼いころの話を覚えていたのでビックリしました。
- ・ ヒゲの兵隊が若い兵隊をなぐった話を一番覚えています。教科書に書かれていない話がとてもわかりました。
- ・ 空しゅうが（宮城県）仙台でもあったことを知ることができました。教科書には書いてありませんでした。
- ・ 私はその日学校を休んで直接話を聞くことができなかつたけれど、資料から太平洋戦争だけでなく、それより前の日露戦争や日清戦争の時の帽子や双眼鏡があることにおどろきました。自分の目で見てみたいと思いました。
- ・ 若い兵隊さん意味もなく顔を殴られた話が一番びっくりしました。これからもカネショウ商店で買い物をしたいと思います。
- ・ 昔の村田町を想像しながら聞いてものすごくたいへんだつたんだな、怖かつたんだらうなと思いました。
- ・ 小学校の先生が毎日かかさず書いていた学校日誌を見ることができたのがよかったです。
- ・ 私は社会が好きではなかつたけど、お話を聞き社会が楽しくなりました。仙台くうしゅうの時に周りや空が真っ赤だつたと聞いた時そんなことがあつたと知らなかつたのでこわいと思いました。
- ・ 戦争中に生きていた人が、今も生きていて話をしてくれたことにおどろきました。
- ・ 戦争中は、人前で泣く事が恥だとされたのはひどいと思いました。
- ・ あんなに小さな水筒に水を入れて、アメリカ軍の飛行機がいなくなるまで待っていたのはすごいと思いました。
- ・ 今は平和な日本だけど、戦争があつたことやその被害は、忘れてはいけないと思いました。
- ・ テレビなどで見るよりも実際に話を聞いてみると本当に大変だつたんだなということがわかりとても勉強になりました。
- ・ 私にひいおばあちゃんも戦争を体験していて、おなじ戦争の中にも、思い出は違うことがわかりました。
- ・ 昔の雑誌は戦争のことばかり書いてあつて、どれだけ日本の子どもたちを軍人にしたいのかという思いがこみ上げてきました。
- ・ 特に大事なゆびわまでつぼうの玉にされてとても悲しかつたんだと思いました。
- ・ 空しゅうの時、避難した道を歩いてみてとても怖かつたんだということが伝わりました。
- ・ ぼくはヤマショウさんやカネショウさんの家が無事だつたこと、悦子さん（母のこと）が無事で良かったと思いました。
- ・ ぼくの祖父にも戦争の話を聞いてみようと思いました。
- ・ 空襲のあつた夜は仙台が火の海になって、ぼくがもしそこにいたらとても怖かつた夜だと思いました。
- ・ この村田町にも空襲が来たこと、戦争に負けたからといって教科書を墨で塗つたこと、アメリカ兵（注 GHQ）がこの家に来てものを取つて行ったことにはおどろきました。
- ・ ひげの兵隊が、下の兵隊をなぐつたことがおどろきました。この家には小さい子どもがいたのに...と思いました。
- ・ もちろんぼくは戦争を体験したことはないし、体験したくもないけど、話を聞いて戦争をおこさないために下の学年の人たちにこの話をしたいです。

以上、村田小学校6学年の児童が感想をしたためた手紙をまとめた。児童はこの企画展に至るまで、社会科で第二次世界大戦や太平洋戦争について学習してきたと聞いている。しかし、教科書で学んだこ

とが、自分たちの地元である宮城県村田町でも起きていたことだという関連性を感じていなかった。教科書に書いてあることは勉強しなくてはいけないことだから学びはするものの、自分とは関係のないことだと考えていた。しかし、筆者の企画した「子どもたちと戦争展」によって、自分たちの故郷も戦争の渦に巻き込まれたこと、自分たちと同じ子どもたちが犠牲になったことを、実感したようだった。

また、終戦時の1945年（昭和20年）というのは、小学生にとってはるか遠い昔の出来事であるという感覚であった。戦争を体験した母が語ることによって、過去と現在が断絶したものではなく、継続しているものだというところを感じたことがわかった。

さらに、この校外授業をきっかけに、自らの家族と話し合いの機会を持った児童もあり、これまで聞いたこともなかった祖父母や曾祖父母から戦争体験を聞くことにもつながったようであった。こうしたことこそが、筆者の願いであり、企画展の意図でもあった。1回目の企画展の時には、多くの子どもたちに見てもらえる機会を得られなかったが、2回目で実現に至ったことは幸いであった。

戦争の事実を実感する品々や戦争を潜り抜けた家屋、そして戦争体験をした母の話という3つの方面から、子どもたちが教科書からの学びだけでなく実感してくれたことは嬉しい。しかし、反省点も残る。銃後の子どもたちの暮らしが、被害者としての立場だけの側面しか伝わらなかったということである。戦時下の子どもたちを取り囲んだ教科書や「軍事絵本」、世論、大人たちの行動、すべてが戦争一色に染められ、敗戦後にその教科書に墨を塗ることを強要された子どもたちは確かに被害者であったと言えるであろう。しかし、そうした中に生きた子どもたちもまた銃後の日本人であり、被害者だけでなく加害者としての側面も持つ。日本が戦争をした相手の国々の子どもたちがどのような暮らしを強いられたのかも学ぶ必要があるだろう。

だが、筆者が企画した戦争展ではそこまでの力はない。歴史のひとつでしかなかった第二次世界大戦という教科書の中の遠い出来事が、今を生きる自分たちと繋がるのだと実感してもらうことが精一杯だった。小学校6年生で学習した第二次世界大戦の裏付けや補強になった点は、目的を達成したので、これは今後の課題となるだろう。

【ChLAでの反応】

2021年6月19日、本来なら現地 America, Atlanta で開催されるはずだった The Children's Literature Association (ChLA) にオンライン参加し、2度にわたる「子どもたちと“戦争”展」開催についての発表することができた。それをきっかけに海外からの反応もあった。

アメリカの大学の研究者から、アメリカにおいて第二次世界大戦について考える時、「真珠湾攻撃」「D-Day」「ロージー・ザ・リベッター」「ナチスによる収容所とそこからの解放」を中心に子どもたちに伝えていくことを聞いた。

日本軍によるハワイ真珠湾への奇襲攻撃はアメリカにとって許しがたいものだ。D-Dayにおいて最も有名なのは1944年6月6日、ナチス・ドイツ占領下のヨーロッパに連合国軍が侵攻を開始したノルマンディー上陸作戦である。「ロージー・ザ・リベッター」という語で説明されるのは第二次世界大戦期に工場や造船所で働く女性たちのことである。そこに、敗戦国日本の問題や、まして銃後の子どもたちの犠牲は、まったく伝えられていない。教育や児童文学の領域の研究者たちにおいてさえ、日本の疎開児童の状況や日本におけるGHQの行動については知られていなかった。一般的に、そして小学校の学習レベルでは、広島・長崎への原爆投下も、ましてや戦争に巻き込まれていった日本の子どもたちについての情報は伝えられてはいない。

しかし、筆者の発表後、話し合いの時間を持ち、その後メールのやり取りをすることができた。複数の研究者からの意見をまとめると、戦後77年を経た今、自分たちの国にとっての戦争被害だけでなく、それぞれの国々でどのような戦争の状況であったのかを、互いに知り合い、伝え合うことが必要だという結論に至った。戦時下における歴史的事実は先に挙げたものだけでは語れない。アリューシャン方面の戦い、旧日本軍のシベリア抑留、日系カナダ人の投獄、日本による韓国の占領など数多くある。そうした歴史はあまり知られていない第二次世界大戦中の物語であり、語られる必要がある。だが、それを伝える時、それらは誰の物語となり、誰が疎外されることになるのか、誰の声が力を持ち、誰が沈黙することになるのかを考えていく必要がある、という議論になった。

筆者の故郷の実家で行った小さな企画展を国際学

会で発表することにより、今後、どのように戦争というものを伝えていかなければならないかという方向性が見えてきた。自国でさえも地域によって、体験してきたことが異なる。それが世界規模となれば、なおさらだ。それぞれの国の立場があり、一つの事象についての捉え方も異なる。まずは、戦勝国や敗戦国の区別なく、各国の出来事の調査を発表し合い、吟味し合うことが必要であろう。それぞれ異なる体験の違いを学び、それへの価値観を知ることが肝要だ。

4. まとめ

2回にわたるこの企画展は、継続したいと願いながらも、2020年3月からの新型コロナウイルス感染防止のために現在は開催することができずにいる。今後、2回の開催から得た学びや反省を生かし、新たな内容を盛り込み開催したいと願っている。筆者は「12月8日」という開戦の日を開催することにこだわってきた。日本人の多くはポツダム宣言受諾の「8月15日」には過去を振り返るが、真珠湾攻撃を行った12月8日は軽んじられていると日々考えてきたからである。

2回目の企画展のあと、地元小学生への校外授業やChLAの他に、ある社会人向けの講義を持つ機会があった。ZOOMによるオンライン講義であったため、日本各地からの参加であった。そこでこの「子どもたちと“戦争”展」について話をしたところ、49名のうちの多くは企画の意図に賛同するものであったが、中には「新聞などのマスコミを使い戦略的であると思う」「GHQを悪く言っているが横須賀などは恩恵がたくさんある」「12月8日開催にこだわっているくせに、日本が行った侵略行為について何も触れていない」「石だけになってしまった指環の金属が弾丸となり人を殺したかもしれないことを伝えるべきだ」「広島が地元だが戦争教育はもっと生々しい。家が残っているというだけでも恵まれている」「戦争の悲惨さを見聞きすると具合が悪くなるので、自分の子どもにも伝えるのに躊躇する」という手厳しいコメントが来た。

同じ日本国内であっても、地域差があるということや捉え方が異なることを思い知った。同時に、戦争を伝えることの困難さも改めて考えさせられた。

今回も「戦後生まれのくせに」という批判の声が出た。企画展にやって来た見学者が、自分の戦争体

験を語らせて欲しいと主張してきた。丁重に企画の意図を説明すると騒ぐという一幕もあり、こうしたイベントの困難さを感じている。しかし戦後77年を迎えた今、戦争をいかに伝えるかということはやはり重要だ。

ポスト・コロナとなる時、今後いかに継続していくべきかという課題についてのヒントは、村田小学校の子どもたちが書いてくれた丁寧な手紙の中にあると確信している。ChLAにおける発表後に寄せられた世界の研究者の賛同も力になっている。困難は予期されるが、継続する努力をしていきたい。

【謝辞】

2回の企画展にあたり、協力をいただいた村田歴史みらい館のみなさまと、村田小学校の校長先生をはじめ6学年担当の先生方、そして、なにより戦争展に興味を持って真剣に勉強してくれた村田小学校6年生の子どもたちに感謝します。

【注】

(注1) 大沼郁子：「子どもたちと“戦争”展」開催の軌跡 - 町家を活かした実践の記録 -, 日本女子大学大学院紀要, 26, 121-128 (2019)

(注2) 河北新報朝刊：2019年（令和元年）12月3日（火曜日）掲載記事

(注3) 大沼悦子：わたしの戦争体験記 - やつでの葉かげから見た村田の暮らし, 大沼郁子・編集, (2019)

(注4) 阿部紀子：「子どもが良くなる講談社の絵本」の研究, 風間書房 (2011)

(注5) 『日本よい國』：大日本雄辨會講談社, 昭和13年 (1938), 54-55

(注6) 河北新報：「河北春秋」2021年8月10日（火曜日）掲載

幼少期に口ずさんだ軍歌を今も母が記憶していたことに驚いた記者が、戦争展の取材とは別に、戦争の記憶を残したいと翌々年再度母を取材。このコラムには本家ヤマショウ（当時）に集団疎開に来て、村田の地で亡くなってしまった少女のことが中心に書かれている。

(注7) 前掲4), 77

(注8) 前掲4), 74